

大和田 茂著

『社会運動と文芸雑誌』

——『種蒔く人』時代のメディア戦略』

評者：立本 紘之

本書は、1920年前後を起点とする日本の社会・労働文学研究に長年携わる著者による、「一九一〇年代はじめから二〇年代半ばまでの時期に刊行された社会主義系文芸雑誌」(238頁)に関する論文・寄稿文を纏めた書籍である。全体の構成としては、大きく四部に分けられ、

I 『種蒔く人』

小牧近江『種蒔く人』への道程—大逆事件、社会主義同盟の関係からの考察

土崎版三冊の意義

『種蒔く人』における〈地方〉—投稿欄を中心に

「愛国」と「過労」をめぐる—労働文学と『種蒔く人』

『種蒔く人』研究の現在

II 『文芸戦線』

関東大震災の記憶—『文芸戦線』における想起・逆説のアーカイヴ

「流言」をめぐる—関東大震災と平沢計七

小林多喜二と文芸戦線—一九二七年の「作品行動」

III アナキズム系文芸雑誌

大杉栄—叛逆精神とメディア戦略

民衆詩派の詩人たち—生命主義的考察

アナキズム文芸誌『シムーン』『熱風』について (付・同誌細目)

IV 『太陽』

『太陽』創刊号の反響

『太陽』編集主幹・浮田和民の位置

の全四章・13本の文章となっている。以下その内容を見ていく。それに際し、章・節番号は評者が便宜上付した。この点ご理解願いたい。

第一章には雑誌『種蒔く人』に関する文章が収められている。

第一節では、まず伝記的資料を元に小牧近江のパリ滞在期の社会主義への近接について、代議士板倉中に聞かされた幸徳秋水と社会主義の話(11頁)などのエピソードを交えつつ語られる。

そして帰国後の小牧の動きについて、武者小路実篤との組織運動観の相違(18頁)、日本社会主義同盟のアナキストとの「感情的な行き違い」(22頁)が、結果として『種蒔く人』への独自の道を生み運動を長らえ得たと著者は考察する(24頁)。

第二節では、雑誌名選定に現れた小牧と金子洋文の労農未分化の性質(33~34頁)や、土崎版『種蒔く人』同人の小牧との近縁性(35~36頁)などに触れつつ、同人の果たした仕事、特に小牧・金子・今野賢三の仕事に紙幅を割き、著者は土崎版の意義を「第三インターの立場からの第二インターの弱点と犯罪性の暴露の画期性」「共同戦線の要素を強く持った社会改革の志向が感じ取れる誌面」「東京版との精神・拠点の継続性」「思想よりも文学に傾いた編集姿勢に基づく文芸雑誌性」であると結論付けている(48~50頁)。

第三節では同誌の常設欄だった「地方欄」の一覧を纏めると共に、その意義について同誌の

(小牧の見識に負う形の) 地方重視の性質の表れであり、「グローカリズム」の行動的先駆に繋がったと述べられ (54頁)、誌面の「マルクス主義」的傾向が強まって以後も、『帝都震災号外』発刊を例に、同誌の地方主義が小牧・金子・今野の3人によって最後まで維持されたことを著者は強く述べる (55頁)。

第四節では、まず平沢計七の作品における、「愛国」意識暴露とその情動的部分にも切り込む創作を「協調的労働組合論」と同時期になし得ていた平沢の特異性と「戦術的な生き方」が述べられる (67～68頁)。次いで細井和喜蔵の作品に現れる工場労働者の疎外と過労の実態は現代まで繋がる問題であることを示し (75頁)、この両者と関係性を持つ『種蒔く人』誌の「豊かさ」を著者は改めて強調している。

第五節では、同誌復刻版刊行 (1961年) 後、研究が盛んになったのは社会主義国家解体後であるとの前提を述べた上で、同誌関係略年表を付しながら現在までの同誌に関する研究整理がなされている。

第二章には『種蒔く人』の事実上の後継誌『文芸戦線』に関する文章が収められている。

第一節では、「震災の記憶」継承の問題に関し、関東大震災における「ホロコースト」(100頁)の犠牲者平沢計七の死の記憶の保持 (102～104頁) や『文芸戦線』誌における記憶継承 (107～108頁) と記念行事の展開 (110～112頁) などに言及することで、著者は「文字による記憶の蓄積と虚構化」を通した事件の記憶継承の重要性を説く (118頁)。

第二節では「3・11」とその後の報道を踏まえ、3・11後及び関東大震災下の流言が共に「官製の報告」に基づく (125～126頁) ことに触れられ、平沢計七虐殺の理由として著者が推測した五点のうち「中国人労働者」排斥問題との関係を強調 (127～128頁)、不況下で

の中国人との衝突が震災下で恐怖心・恨みとして発現し、虐殺が発生、平沢も巻き込まれたとの観点を著者は提示する (129頁)。

第三節では、小林多喜二の日記記述に依拠しつつ、彼の社会主義者への転換と『文芸戦線』小樽支部での活動に言及し (131～134頁)、多喜二の『文芸戦線』誌上唯一の投稿作品「女囚徒」における多喜二の「思想的転換」(136頁) と、批評家江口渙による同作品の「黙殺」が小林自身の「プチブル性」認識と葛藤を生み、「一九二八年三月十五日」へ繋がる (138頁) との流れを著者は描いている。

第三章には、少し時代を遡り1920年代前半までのアナキズム系作家とその刊行物に関する文章が収められている。

第一節では、絶えず弾圧を経験した大杉栄が、非日常的な自我の充足を説く叛逆精神に溢れた姿 (143頁) とは裏腹に、『近代思想』誌が発禁を受けぬよう「内閣」に気を配っていたことを述べ (145～146頁)、その後の他雑誌での発禁状況などを対比させつつ、大杉が非常に慎重な行動を文筆面で取っていたことが強調され、著者による新たな大杉像の提示が模索されている。

第二節では、1918年創刊の雑誌『民衆』を主要な考察の舞台とし、民衆詩が民衆芸術運動の一翼となる流れ (154～155頁) と、運動中軸に位置していた加藤一夫の作品から民衆詩派の思想的核である「生命」を根幹とした思想構築とコスモポリタニズムに繋がる個人主義の性質 (159～160頁) について著者は述べ、その後の民衆詩派の現実的傾向への変化 (163頁) と「民衆」「生命」両性質からの乖離という流れまでが本論文では示されている。

第三節は、アナキスト系文芸誌『シムーン』とその後継誌『熱風』の解題 (付・総目次) として書かれた文章である。著者は「革命ロシア

におけるアナキスト迫害記事」「大杉らアナキストの称揚」「同人の多くがその後のマルクス主義的運動に加わらない」点から同誌の位置付けを図り(169頁)つつ、同誌と『種蒔く人』の対比などを踏まえ「アナとボルには、プロレタリア文学初期段階において「階級」を発見した共有性」(172頁)が存在したと述べ、両誌同人間のアナ・ボル提携の美しさを強調する。

第四章にはこれまでの文章とはかなり毛色が異なり、1895年創刊の総合雑誌『太陽』に関する二つの論文が収められている。

第一節では、永嶺重敏の先行研究を踏まえつつ、同誌創刊号に対する反響記事27件の分析から、「未曾有の大雑誌」に相応しい同誌の構成要素(195～197頁)及び、「百科総覧的」スタイルへの「屈折した評価」(198～199頁)について述べられ、さらに外国雑誌との近似性はあれど「博文館独自の個性」(202～203頁)を著者は強調する。

第二節では、1909年～1917年に同誌主幹を務めた浮田和民の編集主幹就任条件などを通し、浮田の思想的立場である「内に立憲、外に帝国主義」の理念(211～213頁)が述べられる。前者では市民的権利の拡大と「民心」を最重視した浮田の政治姿勢を、後者では彼の代表的主張である「倫理的帝国主義」を取り上げ、特に後者に関しては、浮田が提唱した「東洋モンロー主義」思想とその危うさにも著者は触れている(223～226頁)。以上を踏まえつつ著者は、浮田主幹期の「革命的ー新」という名の独自色とは総合情報誌からオピニオン誌への脱却であった(228頁)とするが、刷新が形式上の域を出ず『中央公論』・『改造』に読者を奪われた点も述べている。

以下本書に関して評者が感じ、考えた点について記していく。

巻末『初出一覧』に記されているように、本書を構成する文章は、著者が様々な雑誌、書籍に寄せた論文・寄稿文となっている。その性質が一面では内容の多様性を齎しているが、もう一面では書籍としての構成の揺らぎに繋がっていると評者は感じた。

それが顕著に表れているのが第四章の存在である。この章は著者がタイトルで高唱する「社会運動」「文芸雑誌」「『種蒔く人』時代」のどれにも該当しない。そうした論文が本書の最後にいきなり登場し、それに対し著者の説明が一切されない不自然さとが相俟って実に異質な章となっており、一貫したテーマで纏まってきたこれまでの本書の構成を乱す印象を与えている。

この章を本著の中に位置付けるならば、タイトルにある「メディア戦略」の言葉で繋ぐ方法があり得る。『『太陽』創刊号の反響』の節は、同誌創刊号の性質分析というまさにメディア戦略に関する論文である。またかなり広義的解釈だが、『『太陽』編集主幹・浮田和民の位置』の節を、「大正デモクラシーの旗手」「日露戦争後の自由主義思想を先導したオピニオンリーダー」(206頁)としての浮田と『太陽』の関係を考えるという著者の狙いから、明治末・大正初期の市民・社会運動の基軸思想研究の一環と位置付け、同節を社会運動と結び付けることは可能である。だがこの章が本書のメインテーマである「一九一〇年代はじめから二〇年代半ばまでの時期に刊行された社会主義系文芸雑誌」の研究という領域から大きく外れ、研究対象・時期の何れにおいても断絶がある章だというのは否めない。

著者は巻末「あとがき」で、「社会運動」という言葉を書名に入れたことに対し、「社会運動を通史的に、または文学との関係でトータルに見渡した本ではありません」と断った上で、

民衆芸術・労働文学など「社会運動とリンクしようという動き」の中で「運動」を自覚したメディアの意義と、社会運動系文芸雑誌の活動から得られる現代の状況にも通じる示唆を強調する(238～239頁)。著者がこう述べるのは、本書に現代の諸問題・諸事業からの要請に基づき書かれた文章が多く見られるのがその一因であろう。

このうち『種蒔く人』『文芸戦線』については、著者がメンバーとして研究報告や寄稿などの形で活動に大きく関わってきた『種蒔く人』『文芸戦線』を読む会が主導する『種蒔く人』の顕彰活動に寄せた文章が散見される。例として第一章第一節は『社会文学』第35号(2012年2月)の特集「『種蒔く人』と秋田」に寄せられた文章で、2011年11月の「『種蒔く人』創刊90周年の集い」で著者が行った講演が元となっている。また第一章第三節は、「『種蒔く人』80周年の集い」を元に構成された書籍『『種蒔く人』の精神』(DTP出版、2005年)に著者が寄稿した文章である。

この他にも現代の諸問題の要請に基づく要素は見られる。例えば第一章第四節は、『社会文学』第25号(2007年2月)の特集「〈働くこと〉と〈戦争すること〉」に寄せられた文章で、本特集は同誌の母体である「日本社会主義文学会」の2006年度春季大会の全体テーマ特集である。また第二章第二節は、雑誌『群系』第28号(2011年12月)の特集「震災・戦争と文学 1. 「3・11」の大震災と過去の大災害」に寄せられたものである。さらに第三章第一節・第二節も、「発禁本とその周辺をめぐる問題系」や「「生命」で読む20世紀日本文学」などのように寄稿誌の特集に応じた内容となっている。

本書構成文章の初出事情について述べたが、こうした文章のあり方は現代の社会文学研究の

大きな役割の一つと言えよう。「3・11」を巡る現在の各分野での諸研究に顕著なように過去の災害における教訓・事例を振り返りつつ、震災後の日本社会のあり方を考えるというような、現実問題からの強い要請に答える研究はこれからの日本の学術領域においては真摯に追求されねばならない。そういう意味においても本書は現代の学術研究領域の最先端の一翼に位置付けてよい研究と言えなくはない。

しかしながら、著者にも躊躇いがあったように社会運動史研究、またプロレタリア文学運動史研究として本書を考える上で疑問に思う部分の評者にはあった。

著者も含め90年代以降のプロレタリア文学研究があまりに「原点回帰」に執心していないかという点がそれである。翻って見ればそれ以前のナップ(全日本無産者芸術聯盟)を中心とした文学史観全盛期の文学研究領域においても、小田切秀雄が「頽廢の根源について」(『思想』(351), 1953年)で、共産主義文学以前に目を向けることを訴えて以後「ナップの眼鏡をはずせ」と主張し続けたり、飛鳥井雅通が1970年代の諸研究で「文化運動によって政治運動を代行させる」発想を、本書でも取り上げられた雑誌『近代思想』の1912年まで遡り、その後の労働文学・民衆芸術を経て『種蒔く人』期以降の組織的文芸運動へ繋ぐ観点を提示したりするなど「原点回帰」の先駆的研究・論説は存在する。

その後の冷戦構造崩壊等に伴い、特定の政治目的に利するための「マニユーバ」的利用という桎梏から解放される中、文学研究がなお社会運動・社会状況と近接性を保持するための模索が続く中、現在に至るまでに得られた回答の一つが上記したように現実の諸問題の要請に答え創作・研究を行うあり方であり、もう一つが政治思想に「毒されていない」時期の多様性を持

った文学の原点を探し求めるあり方である。

著者は第一章第五節で「社会主義国家解体後に、関連研究文献がいくつも出てきている」(79頁)と述べているが、それは「皮肉なこと」ではなく、ある種必然だった。『種蒔く人』以前の社会文学に「ナップの眼鏡」では見られない多様性と自由、社会運動全領域との交流・相互影響性を求めたい意識が、研究者を「一九一〇年代はじめから二〇年代半ばまでの時期に刊行された社会主義系文芸雑誌」研究に向かわせたのである。

これはある種特定の思想目的への「マニユーバ」的文学利用ではないか。評者は上記の意識の背後に、プロレタリア文学運動末期の1933年頃に林房雄や徳永直らが提起した「文学への回帰」意識との近似性をも感じる。ナップ期を中心とした共産党系文学運動の組織論的研究を思想的中立な立場から試みている評者としては、戦前期の状況と同様に、社会文学領域が「ナップの眼鏡」を必要以上に警戒し、過度に「非政治化」を意識しているようにも見える。

小田切秀雄は90年代末に「ナップの眼鏡」をはずすことには、その当時の党の立場・革命運動の進め方そのものを検討の対象にすることの不可避性を伴うと「補足」している(「「ナップの眼鏡をはずせ」の回想と必要な補足」(『新日本文学』54(4), 1999年))。現在の社会文学研究はこの小田切の提言に答えられているだろうか評者は疑問に感じた。

以上若干の疑問点について述べたが、本著は近年の大正期・昭和初期の社会文学研究動向の最先端に位置すると同時に、研究整理・資料紹介などの点でも大いに利となる書籍である。プレカリアート問題との近接性などの観点から、社会文学・同研究のさらなる進展が期待される昨今、本著はその動きに大きく寄与する一冊として高く評価したい。

(大和田茂著『社会運動と文芸雑誌——『種蒔く人』時代のメディア戦略』菁柿堂、2012年5月刊、250頁、定価2,000円+税)

(たてもと・ひろゆき 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)